（10）かんしょの主要な病害虫

病害虫	被害の概要
蔓割病	植付け後に葉が黄化し、茎の伸長が悪く、茎に割れ目が発生し葉が黄変して枯死する。砂地や高温の年に発生が多い。発生圃場での連作を避け、種いもや苗を完全に消毒する。
黒斑病	植付け後に下葉が黄化して落葉し、生育を停止する。種いもや苗によって感染し、畑での防除は困難である。
黒星病	８～９月に発生する。葉に始め褐色の１～３㎜程度の円形の病斑が現われ、淡褐色～灰褐色に変色して葉が枯死落葉する。銅製剤の効果が高い。被害葉の処理、種いもの消毒を完全に行なう。
立枯病	植付け後、つるが伸び出さず、葉が黄色～紫紅色を帯び、しだいに萎れ生育が不良となり枯れる。塊根の表面に円形の黒色の病斑ができ、古くなると陥没しコルク化する。 土壌伝染する。地温が高くなるマルチ栽培で発生しやすく、土壌が乾燥しているほど発生が激しい。
ナカジロシタバ	西日本の暖地に多く、成長すると全葉を食害して大被害を及ぼす。年３～４回世代をくり返し、被害は秋期に最大となる。発生初期にDDVP乳剤やﾃﾞｨﾌﾟﾃﾚｯｸｽ乳剤で防除する。
イモコガ	苗床から収穫期まで幼虫が食害する。糸を出して葉を巻き、内部にひそむ。暖地では６～７世代、中間地で４～５世代をくり返す。防除法は、ﾅｶｼﾞﾛｼﾀﾊﾞと同様である。
ハスモンヨトウ	幼虫が葉の裏面を食害し、表面だけが残る。葉が白くなるので発見は容易である。４世代をくり返し、防除法はﾅｶｼﾞﾛｼﾀﾊﾞと同様である。
コガネムシ類	幼虫の発生は８月中旬頃に最高となるので、防除は、幼虫の発生初期の７月上旬にﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ粒剤、微粒剤、ﾊﾞｲｼﾞｯﾄ粒剤などを施用するかｾﾝﾁｭｳ防除を兼ねて土壌消毒を行う。
ネコブセンチュウ、ネグサレセンチュウ	初期生育の遅れや栄養障害症状、いもの奇形と表面の褐色～黒褐色の斑点などの被害がでる。連作をさけ、落花生などの拮抗作物の栽培に加えて、青果用の栽培ではｸﾛﾙﾋﾟｸﾘﾝ、DDで消毒する。